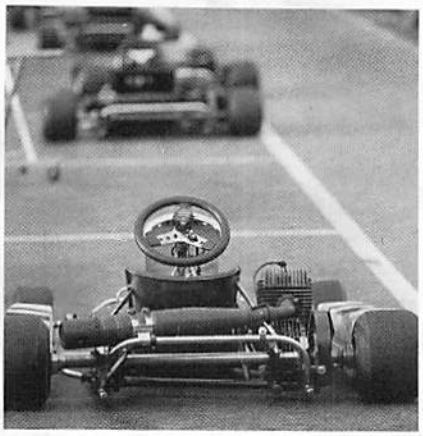
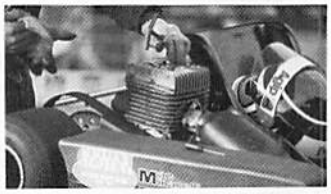
前へ！ FJ—1600

DERECTION SHUHEI NISHIZAKI
TEXT BY AKIHIRO KOMIYAMA
PHOTO BY SADAHO NAITOH



水野昇太選手を応援して下さる
スポンサーを募集しています。
〈お問い合わせ先〉
フェイム事務局
〒604京都市中京区六角通烏丸東入ル
大輝六角ビル2F
Tel（075）256-7558 担当／西堀・片田



LAP11 PRIVATE

カーレーサーというと、今でも金持ちをイメージする人が意外に多い。

確かに当初のカーレースは金持ちの道楽的な形で進歩を遂げていった。また、メディアによく登場するトップカテゴリーのFーやF3000が華やかに見えることや、それをスポンサードしている企業が一流ばかりというのも、かなり影響しているのだろう。

そのイメージは間違ってはいない。F1のトップレーサーたちが、庶民では一生拝むことのできない年俸を得ていることは誰もが知る事実だから……。

しかし、単純にカーレーサー＝金持ちとしてしまうのも正解ではない。なぜなら、そういったレーサーは、世界中にいるプロレーサーのほんの一握りでしかないからだ。

プロレーサーはプロボクサーに似ている。勝つことによって自らのランクを上げ、世界で名が売れるようになってこそ、初めて金持ちといわれるだけの報酬が得られるのだ。

ただプロレーサーがプロボクサーと違うのは、いくらハングリー精神を持ち、どれだけ強くても、それだけでは決して勝つことができない点である。

レースに勝つためには、まずマシンを走らせるためのチーム体制が重要だ。それを維持していくために、スポンサーが必要なのだが、カテゴリーが下であるほど、レーサーが自身でスポンサーを探す度合いが高くなる。

ようするに、勝つレースを行うためにはそれに費やす資金とレース中心に動ける生活環境が必要であり、資金がなければ、プロレーサーとしてやっていくためのプライベートな仕事ももたなければならないのだ。

実力とハングリー精神に加え、環境が整わなければプロレーサーはできない。そこがボクサーとは違うのである。

水野昇太は金持ちの御曹司ではない。だから、当然資金はない。今、彼がプロレーサーとしてレースが続けられるのは、実は環境と仕事が得られているためである。

彼が今プロレーサーとして、頂点を目指せるのも、ジェミニカートという仕事場があるからだ。

「ここで働くまでは某フォークリフト会社でメカニックの仕事をしながらカートをやっていたんです。カートで大阪シリーズチャンピオンになったころですかね、ここの社長と知り合ったのは…」

この社長こそ、誰あろう関西のカート界の歴史をつくったともいえる、野田克（つよし）である。

彼は関西のカートの先駆者であり、現役時代の1976年には全日本AーRでシリーズチャンピオンを取った名ドライバー。そして関西にカートを普及させるという夢を実現するため、関西で初めてのカート専門ショップ、ジェミニカートをオープンした。現在も日本のカート界では知らない者はないといわれる人物である。

「ここで働くようになったのは、社長に『ウチで働かないか』と声をかけてもらったからなんです。もともとカート時代から、いろいろな相談にのってもらっていて、人生の先生だと思ってましたから嬉しかったですよ」

だが、彼はすぐに返事をしなかったという。

「ちょうどカートを引退してFJに乗ろうと思っていたときでしたから、仕事で迷惑をかけるかもしれんと悩んだんです。だけど、社長が『それでもいいからウチへ来い』といってくれたんでここで働くようになったんです」

FJはシーズンになれば練習走行、予選、決勝レースと少なくとも週3日は、レース場にいなければならない。また、自分でスポンサーを探さなければならないため、自らスケジューリングのできる仕事を彼は望んでいた。

そんな状況を理解した上で野田はジェミニカートへ彼を誘ったのだ。巷間いわれるとおり、懐の深い男である。「今でもいろいろと相談にのってもらったり無理を聞いてもらってるんで、社長には本当に感謝しています。だからカートの仕事のときでも出来る限り全力をつくして働いているんですよ」

彼のジェミニカートでの肩書きは、メカニックアドバイザー。

基本的にはカートのセッティング、エンジンのメンテナンスを行う仕事である。何か滑稽に映るかもしれないが、彼は、メカニックの仕事で生計を立てているプロレーサーなのである。

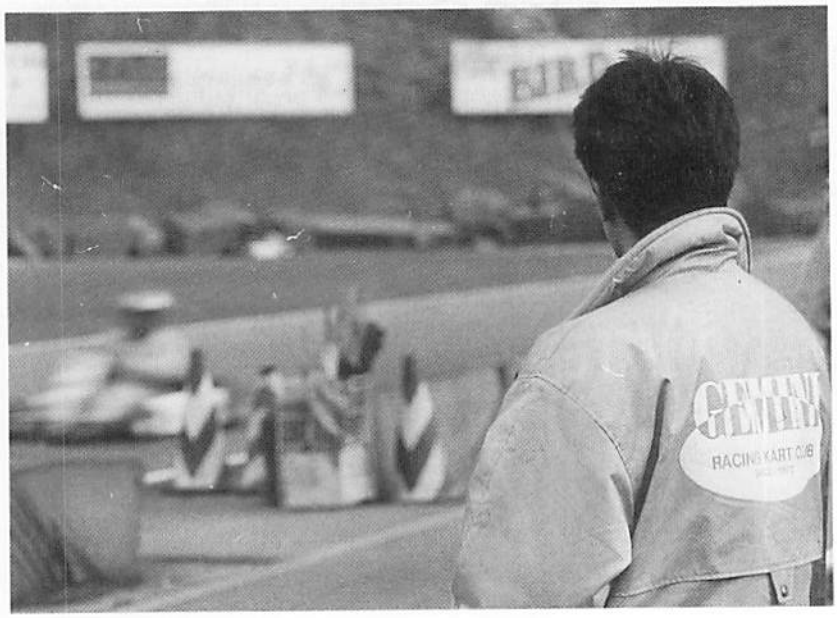
しかし彼は決して単なるメカニックではない。カートに乗る人に対して、ドライビングテクニックやメンタル面についてもアドバイスする。ハード・ソフトを含めたオールラウンドなカートアドバイザーなのだ。

「エンジンのメンテナンスからメンタル面まで、自分の経験して得てきたことはお客さんにアドバイスしています。だけど、いろんな人がいるんですよ。レーサー指向で乗る人もいれば、ストレス解消で乗っている人もいる。お客さんのカートに乗る目的を見極めながらアドバイスするのって結構難しいんですよね」

彼はアドバイスをした後、必ずこう付け加えるという。『僕以外にもいろいろな人のアドバイスを聞くといい』これは、彼のレーサーとしてのポリシーのひとつだ。

「やっぱり走るのは本人ですから。どんな人でも自分にあった走りがあるんですよ。だから、いろんな人にいろんなアドバイスを受けて、その中から自分にあった走りを見つけだす。それが速く、楽しく走れる一番のポイントだと僕は思うんです」

この言葉を聞いたとき、ジェミニカートという仕事場は、彼にとって最高の環境であることを感じた。

なぜなら、単なるレーサーとしてレースを行う者は、えてして唯我独尊的な思想で自滅していくことが多い。だが、彼は客観的な立場で"走る"ということのすべてを、仕事から常に学んでいるからである。

そして、この経験が彼のプロレーサーとしての資質を今も成長させている。